

数学物語

矢野 健太郎 著

実は、数学が苦手です。そんな私が何を考えたか、『数学物語』という題名の本を手に取るなんて……。まず、裏表紙の要約を読んで、ふむふむ。どうやら数学の発展の歴史がメインで難しい数式は少なそう。よし、では読んでみよう。と読み始めたところ、「動物は数を区別できるのか？」というところで、へえ。心理学者も同じテーマで実験をしたということに驚き、古代エジプト人たちは、1本の縄に等間隔の12個の結び目を作って輪にし、3対4対5の直角三角形を作り、この縄を使って測量をした技師や建築家はなわばり師と呼ばれたというエピソードに笑い、解説を読みながら簡単な数式を解いて、最後まで楽しく読むことができました。

物事に、何か一つ苦手意識を持つと、それはどんどんふくらんで、見るのもイヤな状態になってしまう。数学については問題を解くことはできるけれど、できれば避けて通りたい。でも、少し見方を変えると、意外と面白い側面もあり「ちよつとやってみようかな」と問題を解く。解けると「へえ！そういうことやったんや」と嬉しくなって、次のもやってみようと思う。「やってみよう」と思うこと、「どういうこと？」と好奇心を持つこと。これは毎日楽しく過ごすためのエッセンスだと思いました。100%苦手だと思っていたのに、中には面白い部分もあると気付いた時、「苦手だからと言って、全否定するのは、なんだか勿体ない」という思いがわいてきました。



角川ソフィア文庫

M
Y

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)フマッシュョンビジネス・御堂筋新聞